

独りぼっちのへび



文・小原麻由美
絵・小島加奈子

大人の童話
幸せのレシピ

かったのに」

桃色のへびは誰もいなくなった池をほんやりと見つめて、ガックリと首を垂れまわした。

「春なんて大嫌いだ！」

冬の間は眠っていた方がいいので、誰かに会うこともありません。でも春になるとお腹が空くので、食べ物を探しに行かなくてはなりません。

「僕は他の種類のへびと違って、木の実に食べないんだ。カエルさんを襲ったことなんて一度だってないのに」

桃色のへびは春がくるたびに、自分は独りぼっちなんだと悲しくなりました。

「僕は悪さなんてしていない。なのに、見た目だけで嫌われるなんて……」

桃色のへびは、すねて怒って、でもやっぱり悲しくて、しっぽを引きずりながら森の奥へ帰ろうとしていました。

「おやっ？」

浮草の上で体を揺らしながら、背中をむけて座っている黄色いカエルがいました。

「あいつ一人だけ、逃げ遅れたのかな？」

桃色のへびは独り言のようにつぶやきました。

「よしっ、あいつも脅かしてやろう」

桃色のへびは口をガバッと開けて、長い舌をビヨロリと出し、目をつりあげて襲い掛かるふりをしました。

すると黄色いカエルはのんびりと振り向

いて、桃色のへびに頬を寄せてきました。

「甘くて、とってもいい香りがするわね」
桃色のへびはびっくりして、勢いよく後ろへ下がりました。

「さ、さっき、春一番のイチゴを食べたからかも？」

桃色のへびは、ドキドキしながら答えました。

「やっぱり！イチゴの香りだったのね。」

私も大好物よ」

黄色いカエルは、ビー玉のような青白い瞳をキラキラさせました。

「ほ……僕と一緒にね」

桃色のへびは、そう答えるだけで精一杯でした。

「僕のことを怖くはないの？僕は桃色のへびなんだよ」

桃色のへびは、恐る恐る聞きました。

すると黄色いカエルは、ピョンと跳ねて池の淵にやってきました。そして桃色のへびのしっぽから長い胴体をゆっくりと触って、顔の前でちょこんと座りました。

「私、目が見えないもの」

黄色いカエルは空に突き抜けるような高い声で、カラカラカラと笑いました。

「えっ？」

桃色のへびは後ずさりしながら、小さく丸まりました。

「あなたの声は、とっても優しいわ。それにイチゴの甘い香りがするもの。怖くなんかないわ」

桃色のへびは、顔を真っ赤にしてうつぶさきました。

翌朝から、日がのぼり始めた池の淵で座っている黄色いカエルの隣には、桃色のへびが寄り添うようになりました。そして、桃色のへびがもぎとってきた甘い香りのイチゴを、二人で仲良く分け合って食べました。

お腹がいっぱいになった黄色いカエルは、ビー玉のような青白い瞳をキョロキョロさせて、浮草の上にピョンと飛び乗りました。

すると、黄色いカエルの背中に朝日が当たり、池の水面がオーロラのように揺らめきました。

（池がこんなにきれいなのは、カエルさんのおかげだったんだね）

桃色のへびはにっこり笑い、まだうとうととしている黄色いカエルの体にしっぽを巻きつけて、優しく抱き寄せました。

（おわり）

東海ワイド

あいち

ぎふ

みえ

文 小原麻由美 1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」(PHP研究所)、「キュンすけのおくりもの」(三恵社)がある。

絵 小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。